

希少種ヒメタイコウチの生息域外保全に向けた取り組み

カメムシ目の水生昆虫であるヒメタイコウチ *Nepa hoffmanni* (図 1) は、東海地方から四国地方の湿地などに局地的に生息する非常に貴重な昆虫です。奈良県内においては、生息地が点在している状況であり、個体数が著しく減少しています。

この状況を受け、ヒメタイコウチは奈良県版レッドデータブック 2016 改訂版において「絶滅寸前種」に指定されているほか、県の奈良県希少野生動植物の保護に関する条例に基づく「特定希少野生動植物」として厳重に保護されています。野生の生息地での存続が危ぶまれ

る中、万が一の絶滅に備えて安全な施設で飼育・繁殖を行い、野生復帰への知見を蓄積する生息域外保全の重要性が極めて高まっています。



図 1 ヒメタイコウチ成虫

奈良県から「特定希少野生動植物ヒメタイコウチ保護管理事業計画」の一環として委託を受けている橿原市昆虫館では、2019 年より本格的な域外保全事業を実施してきました。同館ではさらなる繁殖技術の確立と、飼育下個体群の安定的な維持に向け、日々研究が重ねられています。



図 2 孵化したての幼虫

ここで大きな課題となっていたのが、幼虫期におけるエサの安定確保です。特に孵化して間もないヒメタイコウチの幼虫(図 2)を健全に育てるためには、適切なサイズかつ栄養価の高い生きたエサを欠かすことができません。

この課題を解決するため、アース製薬と橿原市昆虫館による協力体制がスタートしました。日頃から様々な生物の飼育において高度なノウハウを有する当社は、研究用として適切に管理されたヒトスジシマカの乾燥卵(約 1000 個)を同館へ分与。同館においてこれらを

孵化させ、幼虫(ボウフラ)を代替エサとしてヒメタイコウチに給餌する共同の検証プロジェクトを展開しました。

数ある生物の中からあえてヒトスジシマカを選定した背景には、明確な理由があります。ボウフラは、孵化直後の水生昆虫の代替エサとして最適なサイズであり、その活発な動きが捕食行動を強く刺激します。さらに、乾燥卵の状態でも長期保存ができ、必要な時に狙ったタイミングで孵化させられるなど、飼育管理の面でも極めて高い優位性を備えているためです。

同館における共同検証の結果、ヒメタイコウチの幼虫においてもこのボウフラが代替エサとして極めて有効に機能することが確認され、幼虫の生存率向上において大きな成果へと結びつきました。当社が培ってきた生物飼育の知見やリソースの提供、そして技術的なサポートが、絶滅危惧種の域外保全を支える貴重な足がかりとなっています。

本取り組みは、企業、博物館、行政、教育機関連携の一事例となります。

奈良県が策定した事業計画のもと、橿原市昆虫館が実施主体となり、当社は飼育資材の提供と技術指導を行っています。また、橿原市昆虫館の専門的な指導のもと、「ヒメタイコウチ生息域外保全担い手育成プログラム」が実施されています。本プログラムには、奈良学園中学校・高等学校、および奈良女子大学附属中等教育学校の2つの教育機関が参加。学生たちは昆虫館からの飼育指導を受けながら、実際の保全活動を体験し、取り組み報告会では活発な意見交換が行われました。

2023年度（令和5年度）には、同館で累代した成虫と新たな野生由来のファウンダーを含む計18個体を用いた繁殖により、14個体の新成虫を産出することに成功しています（図3）。次世代を担う学生たちへの教育還元も含め、地域全体で生物多様性を守るネットワークが構築されています。

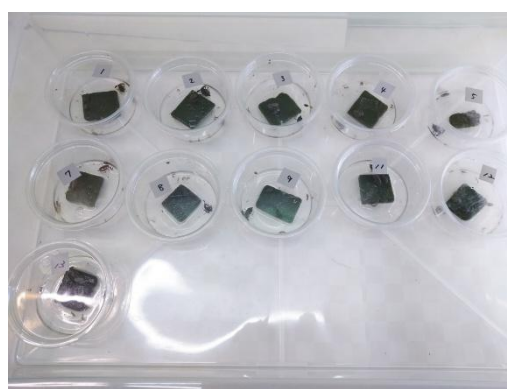


図3 ヒメタイコウチの飼育状況

ヒメタイコウチの繁殖においては、年によって卵が孵化しづらい状況が生じるなど、クリアすべき課題が依然として存在します。

当社は今後も、自社の持つ生物飼育の知見やリソースを最大限に活かし、橿原市昆虫館をはじめとする専門機関との連携を深めていきます。そして、将来的な野生復帰を見据えた繁殖技術の確立に貢献するとともに、持続可能な自然環境と生物多様性の保全に向け、社会的責任を果たしていきます。

※画像はすべて、橿原市昆虫館からご提供いただきました。